

南の島の子どもたち(1)

——オーブンな縦わりの保育が

もたらしたもの——

浅野 恵美子

ここ沖縄は「南の島」という言葉が似合わなくなったと思う。一日に何本もの東京往復便が飛び、朝早く家を出て、東京での会議に参加し、夜帰ってくることも可能である。そして、沖縄も又、他府県同様に情報化社会という巨大な船に乗ってしまった。本土復帰によって、地域性を許容しない天下りのといわれる行政もしっ

かり入りこみ、沖縄らしさは失われつつあるのが現実だ。それでも、それだからというべきか、沖縄らしさを求める動きは根強く、独特な文化的雰囲気は維持されている。

激しく変動する日本の中で、沖縄らしさは、どう生き残ることができるのか。そんな思いをいדיながら、沖

縄で保育者養成にかかわっている視座から、沖縄の親子、保育者たちの話題を捜しつつ、子どもが育つということについて思いをめぐらしてみたい。

今回は、昨年十二月、沖縄県保育の会研究集会で発表された実践を紹介する。これは、沖縄本島北部の中心地、自然の豊かな名護市の120名規模（〇歳―四歳）の公立保育所での出来事である。

◎ドラマのはじまり―三歳児の部屋が暗くてかわいそう
1986年、4月、新しくM保育園に転動してきたI所長は、三歳児の部屋が二歳と四歳のクラスの壁にはさまれて、高い窓一つだけの部屋で、一日中、暗いことが気になり、三歳児クラスの壁を取払うことを提案した。

それまで、クラス中心の保育をしていた二歳児、四歳児の保母は、拒絶反応を示したが、自分たちだけ良ければいいのかと言われると返す言葉はなく、やってみるしかないということになった。

壁は取り払われ、ロッカーや箆筒で簡単に仕切っ

て保育が始まった。予想通り三歳児の部屋は、ぐーんと明るくなり、風とおしも良くなった。又、三クラスを一望に見渡すことができるようになり、部屋がひろく感じられた。部屋がオープンになると、隣の部屋を自由に見ることが出来、行き来もできるようになった。異年齢間の子どもどうしが、自然に触れあい、子どもたちは、保育所全体をわがもの顔に飛びまわるようになった。

予想と違ったことは、騒音がさほど変わらなかったこと。少しばかり騒々しい保育にはなったが、隣のクラスが良く見え、子どもの興味を引くことには、いつでも合流したため、騒音と感ずることはなかったという。むしろ、保母どうしもおたがいの状態が良くわかり、声を掛け合う関係が育っていった。

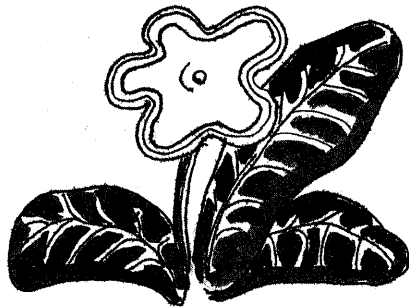
◎「かばまだら」騒動

そんなオープンな環境の中、二歳児の保母のS先生は、かばまだら（沖縄に住むちようちよ）を4、5匹観察ケースにいれて研究のつもりで観察していた。かばま

だらは、「とうわた」の葉しか食べないという。ロッカ
ーの高い所に置き、時々のでいて葉っぱの食べ具合を見
たりしていた。かばまだらは、さなぎになり、5日目には、
ちょうちょになったようだ。虫に弱い保母も一緒に
こわごわのぞき、ちょうちょになるのをみとどけ保母た
ちは満足していた。

そんな折、「センセイ、ミテミテ！」と大声を上げて
外から駆けてきたのは、二歳の男の子であった。なんと
宝ものでもみつけたかのように、掌に幼虫をのせ、目を
キラキラさせて興奮していた。とうわたの葉から幼虫を
見つけてきたのである。他の子もかけより、普段であれ
ば触ってつぶすところを大事そうに皆でのぞきこんだ。

二歳児の興奮は、すぐ隣の三歳児へ伝染し、三歳児
は、二歳児の虫を腕力でとりあげて見た。そして、自分
達も幼虫を集めてきた。興奮は、翌日には、四歳児に広
がった。行動力のある四歳児は、百匹、二百匹、教える
ことができないくらいにかばまだらの幼虫を集めてきて
保母を仰天させた。虫さわぎは乳児にも伝わった。年長



の部屋にやってきて、観察の箱の幼虫に手を突っ込むので、さわらせないように見張り番まで出てきたという。

こうして、どのクラスも保母が誘導したわけでもないのに「かばまだら」に夢中になった。子どもたちが、かばまだらが蝶になって飛び立つのをみたのはいうまでもない。「オカアサン、カバマダラ、ソラニトンデイッタヨ」、「オオゾラガトベテイイナー」、「イイキモチダロウナー」と空にとびゆく蝶への感動は子どもたちの心にきざみこまれた。子どもたちは、卒園した後も、かばまだらのことを「ガッコウノチョウチョ」と親しんでいると言う。

◎響きあう子どもたち、保母たち、親たち

オープンな関係は、その他にもたくさんドラマを生んだ。保母どうしが開かれた関係になるにつれて、親たちとの関係も開かれたものに変化していった。自分が担任ではない親や子にも、気軽に声をかけ、親しく談笑するのが増えた。120名の子どもたち一人ひとりに十三

人の保母の暖かい目が注がれ、広がっていった。

運動会は、異年齢でできてきたつながりを活かしたものにしようということになった。全体集団でとりくめ、多くの遊びを入れることができ、地域とも関わってけるものというところで「かえるのつなひき」が選ばれた。

運動会実行委員会が作られ、保護者にも「かえるのつなひき」の絵本の読み聞かせをしてもらい、日々の保育の中で、どんな内容、演出が可能か模索した。しかし、うまい方向がみつからず、保母たちはおちこんでいたという。そんな中、子どもたちは、「ヤッスイ、ヤッスイ」と掛け声をたのしみ、「カエルノツナヒキヨイヨイ」と口ずさんでいた。保母は、これにできそうだといいことでピアノの前にすわり、保母どうし、知恵をだしあい、とうとうM保育所のオリジナル曲「かえるのつなひき」ができたのであった。それからは、準備はスムーズに流れて、遊びながら、その日の為に備えていった。親たちには、運動会というものの意義とねらいを考えさせるプリントをくばり、参加の体制を作って準備し

た。

そして、子も親も保母も一緒に遊び、燃える運動会は、大成功に終わった。園児席というものを無くし、親の側から自分の出番に励まされて出、もどるとうんと褒めてもらい、親も子も満足だったそう。反省会も、自然に親も残ってくれて、感想を出してくれ、保母たちもうんと褒められ満足だったそう。

M保育所は、地域の中に子どもらの遊び場を開拓し、広げる一方で、「遊びの時を捉えた保育」「遊びの時をつくる保育」の伝統のようなものを育てたのである。

保母たちは、偶然の出来事を大切にし、子どもの変化に注意し、遊びを演出し、自ら遊び楽しんでいる。遊びが、子どもらの生命を躍動させている。遊びは、子どもの心にある、とどまることを知らないわきいずる泉のようである。

◎オープンな関係が成功したわけ

沖繩は、もともと南国で暖かく、家のつくりも人間関

係も開放的であった。庶民の家は、玄関に立てば総てみわたせる作りであった。故に、人々はあけすけの関係で、裏表がないのが良さであったろう。それが、生活の近代化の中で失われてきている。偶然からではあったが、M保育所の保母たちは、オープンな関係の中で自己を開放しつつあるように見える。私は、これが沖繩らしい保育かも知れぬと思う。

女性だけの職場は、何かと人間関係でのトラブルがつきものである。それを避けようとしてクラス主義に陥ることもあるだろう。M保育所の保母たちは、自分は、保育者として能力はあるのか、無いのかという張り合いの緊張感から開放された。集団の中で、周りから自分の保育を見てもらえることは、気を使うことではなく、見てもらえる喜びであることを知った。自分の持味を捜し、それを全体の中で活かそうという熱気が感じられる。勿論、仲間の変化にも驚きあい、その良いところをみつけあう雰囲気も育てている。オープンな保育は、そのような保母たちのチームワークがあって成功したのだ。おま

つり好きのウチナンチュ（沖縄人）の心に合致したのかも知れない。

M保育所の体験は、私たちの暮らしの中にも、いつの間にか閉じた関係ができていて、交流の機会と楽しさが失われていることを思わせる。個我をすっかり育て、かつ個我を乗り越えて人格性を自覚した人間を保育集団はどう育てることができるのか。M保育所の保母たちは、少なくとも一つの回答を見つけたと思う。それは、補い合いつつ、一緒に保育を作り、自分の責任を果たし、それぞれに成長するというやり方である。

ハイテク時代に突入した分、人々が社会の巨大な動きに気をとられ、それとの関係にふりまわされ孤立して自分を見失いつつある今、沖縄の保育所（園）は、地域文化の創造の重要な手になりつつある。保育園は、私たち、子どもたち、保母たちのいきいきした出会いのある楽しいところである。

沖縄の保育園は、商業ベースでの教育産業的な色彩を

持って進んでいる部分とこのM保育所のように、遊びを中心として地域文化を育てる方向で発展している部分に分かれている。そして、遊びを知らない優秀児の悲劇も聞かれるようになって久しい。

子どもたちは、放っておいてもハイテク社会に順応していくだろう。子ども時代に十分に遊び、社会性、現実性、集団性を学ぶ機会に恵まれた子どもたちは、様々な困難をのりこえていく力、人間としての幸福をつかみとる力を育てたのだと思えるのである。

（沖縄キリスト教短期大学）